

創刊35周年を迎える、ますます面白く。

季刊

# 中医臨床

CLINICAL JOURNAL OF TRADITIONAL CHINESE MEDISINE

- 定価：本体 1,571 円+税 送料 210 円
- 1年予約：本体 1,571 円+税 4 冊 送料込
- 2年予約：本体 1,500 円+税 8 冊 送料込
- 3年予約：本体 1,429 円+税 12 冊 送料込

134号 【特集】漢方エキス製剤の中医学的運用—合方のコツ—

漢方エキス製剤を使いこなす！



漢方エキス剤は、昭和期に、日本の漢方家が日本の漢方臨床のために考案したものである。

製剤化されたことで、均質で、服用しやすいというメリットがあり、1976年に健康保険に収載され、現在では医師の9割が処方するまでになっている。

今回、そのエキス剤の運用の幅を広げるべく、中医学の知識をどう活かせばよいのかを特集した。

中医学を熟知する医師を中心に、エキス剤の中医学的運用、特に合方の考え方と実際の使い方について、それぞれの経験にもとづいて紹介する。

[座談会] 菅沼栄・田澤寛子・廣田薰

[総論] エキス剤合方の効果的な運用（入江祥史）

[各論] 合方の実際——私の使用経験（渡邊善一郎・加島雅之・滝沢健司・別府正志・田中耕一郎）

●通巻135号：【特別連載】産婦人科疾患①—月経にかかる疾患の中医学治療

●通巻136号：【特集】日本で活かす温病学

近日発行 6月号（通巻137号）では、「不眠症の中医学療」を特集します。

注目記事

## 本場中国の中医から学ぶ 「名老中医の不妊治療」（133号）

不妊治療は生殖医療技術の進歩によって改善されている面もあるが、いまなお不妊で悩み苦しんでいる人は少なくない。中国でも日本と同様に子宝に恵まれず、中医学に望みを託す患者は多い。そんな不妊治療を得意とする名医は、ときに「送子觀音」（子授け觀音）と形容され尊崇されているが、本特集ではそんな名中

医が、どのように不妊症を治療しているかを俯瞰する。まず、婦人科を専門とする北京中医薬大学東直門医院の2人の先生（王子瑜・肖承悰）にインタビューを行い、不妊の中医学療の概略をお伺いした。その他、中国の婦人科流派がどのように不妊症を捉え治療していたのかを整理した。

詳しくは当社ホームページをご覧ください。

<http://www.chuui.co.jp>



東洋学術出版社

ご注文は、メールまたは  
フリーダイヤルFAXで

FAX.0120-727-060

〒272-0823 千葉県市川市東菅野1-19-7-102 / 電話047-321-4428 / E-mail:hanbai@chuui.co.jp / ホームページ●<http://www.chuui.co.jp>

# 最近号の読みどころ

その1

馴染みにくい温病学をわかりやすく！ そして使いやすく！

【特集】「日本で活かす温病学」(136号)

中医学と日本漢方の相違点はさまざまあるが、温病の認識の有無もその1つだろう。日本で漢方を学ぶ方にとって、温病学は最も馴染みの薄い分野かも知れない。しかし中医学において温病学は欠くことのできない重要な学科であり、臨床においても感染症はもとよりさまざまな慢性・難治性の疾患に対して活用されている。湿熱が絡む疾患は難治になりやすく、その治療には温病学の理論と処方が欠かせないからだ。

本特集では、温病学に造詣が深く、実際に臨床で活かしている先生方（平馬直樹・林賢濱・加島雅之・板倉英俊）に集まっていただき、その経験を中心にお話いただいた座談会を

掲載した。日本の保険の範囲で使用できる方剤や生薬で温病処方を構成することは難しいが、座談会からは温病学の考え方を応用したり、代替できる方剤や生薬を用いることで、上手く湿と熱を乖離させ難治の病を治療していく様子が浮かび上がってきた。

さらに馴染みの薄い温病学の基本的知識を身につけられるよう、菅沼栄先生に簡潔・明瞭な解説をしていただいた。「温病学の概略」「衛氣營血弁証」「三焦弁証」「温病学の代表処方」がコンパクトにまとめられており、温病学を一から学ぶことができる。

その2

現代中医学に欠ける肝気虚の概念と治療。

「肝気虚の理法方薬」 篠原明徳 (133・134号)

日常診療において、倦怠感を訴える患者は非常に多い。そしてその大多数は、食欲が良好あるいは亢進し、甘味を欲して肥満傾向にある。過労と飽食の現代社会においては、このようなタイプの気虚が大部分を占めるが、現代中医学の教材である『方剤学』に列挙されている補氣剤は、ことごとく効果がない。

筆者はこう述べ、現代社会の気虚の大勢は肝気虚であるにもかかわらず、現代中医学の教材はこの点を十分に意識して書かれ

ていないと指摘する。

そこで本稿では、まず肝気虚の病理の本質を明らかにしたうえで、それに対応した治法・用薬について考察を加えていく。そして、自ら考案した肝気虚の治療を目的とした基本処方「起肝湯」について紹介する。

現代中医学の足らざるところを補完する意欲的な論考。

その3

経方理論で読み解く興味深い考察。

「麻黄升麻湯・乾姜黃芩黃連人参湯・升麻鱗甲湯について」江部洋一郎 (134・135号)

一般に、麻黄升麻湯と乾姜黃芩黃連人参湯はそれぞれ上熱下寒の一形態、また升麻鱗甲湯証は疫毒によるものと説明されているが、一定の見解がない。

そこで、経方理論にもとづき再考察を試みたのが本稿である。麻黄升麻湯については、傷寒六七日をキーワードに病態を明

らかにし、経方医学的に処方の組み替えを試みる。

乾姜黃芩黃連人参湯については、太陽陽明合病における葛根湯・葛根加半夏湯証や、葛根黃芩黃連湯証を参考にしながら、瀉心湯類・黃連湯との比較から、心下における気と飲の関係と黃連の作用についても考察する。

その4

中医病証の源流を探る。

「消渴」 姜徳友 (136号)

現在、消渴はしばしば現代の糖尿病と解説されることが多いが、歴代の医家は消渴という病証をどのように捉えてきたのだろうか。

消渴に対する中医学の取り組みの歴史は長く、はるか古代に遡る。消渴という病名がはじめて現れるのは『黄帝内經』であり、その弁証論治は『金匱要略』、証候分類は『諸病源候論』

から始まり、理論体系は唐代に形成された。消渴は病因が複雑で多くの臓器に影響を及ぼすため、臨床症状も複雑多岐にわたり、病機もそれぞれ異なっている。

そこで本稿では、(1) 消渴の病名、(2) 消渴の病因病機、(3) 消渴の論治の3点に絞って、消渴に対する歴代医籍の論説を整理し、消渴の源流と特徴を浮き彫りにする。